

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本看護学会論文集:小児看護(2006.02) 36号:312~314.

小児看護学における学生の興味・関心度を高める授業の工夫  
—栄養専攻教員との共同による調理実習室使用での調乳・離乳食の演習  
の効果—

伊藤良子、久保田のぞみ

# 小児看護学における学生の興味・関心度を高める授業の工夫 ——栄養専攻教員との共同による調理実習室使用での調乳・離乳食の 演習の効果——

伊藤良子<sup>1)</sup>・久保田のぞみ<sup>2)</sup>

key word : 小児, 栄養, 演習, 興味, 関心

## I. はじめに

食のありかたを、健康と生活の基盤として見直す動きが高まっている今、とりわけ、次世代を担う子どもたちの食環境の乱れが問題視され、積極的に見直されるべき状況となっている。そこでまず食の出発点である離乳期の乳児を持つ保護者への支援が重要である。看護者は、支援の一担い手となるため、離乳期乳児の栄養と食事についての理解を深めていくことが必要である。小児看護学においてそれらの基盤を築いていくことが重要な課題であり、そのためには学習者が興味・関心を持っていくことが必要である。

調乳・離乳食の技術演習においては、山村ら<sup>1)</sup>の研究により、看護系大学では76%と多くの学校が実施していることが明らかとなっている。泊ら<sup>2)</sup>の研究では、離乳食の演習について「献立の立案」「調理実習」「試食」と行っている学習効果があることを報告している。今回小児看護学の授業において、子どもの食に興味・関心を持てる演習の試みとして、栄養専攻教員との共同で調乳・離乳食についての演習を行った。短時間の演習時間でもできるように離乳食は市販のレトルトを使用した。演習終了後の質問紙調査にて学生の興味・関心が高く、満足度の高い学習意欲へとつながる結果となったので報告する。

## II. 研究目的

小児看護学の授業において、子どもの食に興味・関心を持てる演習の試みとして、栄養専攻教員との共同で調乳・離乳食についての演習を行い、演習への興味・関心・満足度と演習の効果を明らかにすることを目的とした。

## III. 研究方法

### 1. 対象

専門基礎分野における栄養代謝学の履修が終了している看護短大生2年前期の演習受講者48名。

### 2. 期間

2005年4月～6月

### 3. 方法

2005年5月16日(月)演習終了後に質問紙調査を行った。

質問内容は演習への興味・関心・満足度として5項目、演習の効果として4項目とした。リッカート尺度で5段階(5:とても思う, 4:思う, 3:どちらでもない, 2:あまり思わない, 1:思わない)とした。問1～9について5段階を3段階(3:とても思う, 思う, 2:どちらでもない, 1:あまり思わない, 思わない)とし、単純集計した。

他に口腔の構造の違いについて実体験からの理解や食事の自立過程の理解についてなどの効果を検討するために、「ミルクを哺乳瓶で飲んでみての感想」「離乳食の演習での学び」について自由記載とした。

### 4. 演習内容

#### 1) 演習目的

- ・調乳ができる。
- ・口腔の構造の違いについて実体験から理解を深める。
- ・食事の自立過程を理解できる。

#### 2) 内容

調乳と離乳食調理後試食。

#### 3) 時間

演習を135分。

#### 4) 使用資材

哺乳瓶, 乳首人数分。粉ミルク。離乳食は、市販のレトルトで、グループに2ヶ月, 3ヶ月, 5ヶ月, 7ヶ月, 9ヶ月, 12ヶ月のものが各1食分(各グループメニューを変えた)。

#### 5) 方法

1グループ4人で12グループとした。

調理実習室において、調乳は、1人ずつ行い、離乳食については、グループで作成し、試食室にて試食をした。

試食時には、栄養専攻教員提供の「味覚のしつけは、乳幼児から」(農山漁村文化協会制作)という20分の離乳食についてのビデオをみた。教員の手作りおやつ、たまごぼろ、赤ちゃんせんべいも配布し、試食。また他のグループの試食もした。

1) 市立名寄短期大学看護学科 2) 市立名寄短期大学生活科学科栄養専攻

表1 調乳・離乳食の演習についてのアンケート結果

(n=45)

質問	とても思う	思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
問1	28名(62.2%)	17名(37.8%)			
問2	19名(42.2%)	25名(55.6%)			
問3	22名(48.9%)	18名(40%)	5名(10.4%)		
問4	9名(20%)	16名(35.6%)	20名(41.7%)		未記入1名(2.2%)
問5	21名(46.7%)	22名(48.9%)		1名(2.2%)	未記入1名(2.2%)
問6	9名(20%)	28名(62.2%)	7名(15.6%)	1名(2.2%)	
問7	20名(44.4%)	24名(53.3%)		1名(2.2%)	
問8	13名(28.9%)	27名(60%)	1名(2.2%)	3名(6.7%)	1名(2.2%)
問9	6名(13.3%)	25名(55.6%)	12名(26.7%)	2名(4.4%)	

### 5. 倫理的配慮

演習を始める前に、研究の趣旨と内容は個人の成績評価には関係ないこと、公表するにあたり個人が特定されるようなことがないこと、途中承諾を変更することがあっても不利益がないことを紙面と口頭で説明し、承諾の得られた回答を使用した。

## IV. 結 果

受講者48名中45名93.6%の承諾を得られた。問1～9についての結果は、表1に示すとおりである。

問1～9において「とても思う」「思う」と回答があった結果と理由を以下に示す。

「問1. 今回の演習は興味関心を持って参加できましたか」45名(100%)。理由としては、「自分がどんなものを食べていたのか興味があった」「自分の子どもを産んだら必要となる」「将来役立ちそう」「離乳食を一度食べてみたかった」「哺乳瓶の口は大人には吸えないと聞いたので本当かどうか吸ってみたかった」「赤ちゃんと母親の気分を両方体験できたから」「成人とは全然異なっているので、新鮮だし、こういう講義じゃないと自分が子どもを産むまで食べることができないと思うので良かった」などであった。

「問2. 演習内容に満足ですか」44名(98%)。理由としては、「いろいろな味・形を楽しめた」「赤ちゃんの食べているものを味見できたから」「ミルクの作り方をできたこと」「先生の説明もわかりやすかった」「いつもはやらないことで座学だけでなく、たまにはこのようなこともやりたいです」「グループの人数が少なかったので、参加しやすかった」「成長の過程と食事の過程がわかった」などであった。

「問3. 調理実習室使用についてよかったと思いますか」40名(89%)。理由としては、「調理するにあたって一番適切だった」「調理を学習するために来たという心がまえができた」「作る場所と食べる場所が別々だったので、ごちゃごちゃせず食べれた」「効率よくできた」「広々とした場所でできた」などであった。

「問4. 栄養専攻の先生が入っての演習は良かったと思いますか」25名(55.6%)。理由としては、「ビデオがみれた

から」「栄養専攻の先生が入るとさらに心強いと思った」「安心して実習室が使える」「わかりやすく教えてもらえた」「栄養のスペシャリストに教わることができた」「質問しやすかった」などであった。

「問5. 今回の演習は今後役に立つものであると思いますか」43名(96%)。理由としては、「看護師としてだけでなく、自分の子育ての時にも役立つ」「赤ちゃんの食べるものと自分が食べるものの違いが良くわかりました」などであった。

「問6. 哺乳瓶の消毒・扱いができるようになりましたか」37名(82.2%)。

「問7. ミルクの計り方はできるようになりましたか」44名(98%)。

「問8. ミルクの溶かし方ができるようになりましたか」40名(89%)。

「問9. ミルクを適温につくることができるようになりましたか」31名(68.9%)。

演習での学びの自由記載内容では、ミルクを飲んでみての感想には、「飲みづらかった」「おいしくなかった」、離乳食については、「赤ちゃんつものすごく味の薄いものを食べているんだと実感」「成長につれてご飯が変わっていくのが全部並んでいたのではっきりわかってよかった」「赤ちゃんがどんなものを食べるか、親はどんなことに気をつけなければいけないのかを学べた」「最初はサラサラで成長していくにつれてつぶつぶが増えて、かみごたえがあるものになった」「赤ちゃんの食べ物は大きくなるにつれて、味・食感がだいぶ変わるのだと改めて思いました」「赤ちゃんがミルクだけでしばらく育つのを知らなくて驚いた」「食べることは大切だから、しっかり食べさせてあげることが大事なことだと思いました」「赤ちゃんの気持ちになれた」「ただミキサーにかけたり、すったりしているのではなく、味も薄くてきているのがわかった」などであった。

## V. 考 察

### 1. 興味・関心・満足度について

食は生命の源と言われ、小児看護学の対象である乳幼児、

学童への心身ともに健康に育てるための安全で安心な「食」の取り組みが行われている。栄養バランスだけでなく、調理やマナー、あるいは地域の食文化なども含めて、食を通じて人間性を向上させるための教育が必要とされている。そのため、小児看護学では、それらのことを理解し、実践していく能力が必要とされる。子どもの栄養・食事について興味・関心を持ち、学んでいくことはそれらの実践能力へ通じるもので重要である。

今回の結果から、小児看護学における調乳や離乳食の演習は、興味・関心度が高く、学生が自分自身のことにおきかえて学び、また自分の将来をイメージして学んでいた演習であったといえる。調理実習使用については、演習内容にあわせて心構えができ、演習しやすい環境にあったと考える。演習環境は学生の学習意欲に影響するため、栄養専攻の協力により調理実習室を使用できたことは効果的であったと考える。栄養専攻の教員の協力については、半数の関わりがあった学生には、学びやすいということがわかった。今後は全員の学生と関わりをもてるようにすることで、より学生が学びやすさを感じられるものになると考える。吉田は「学生は自分の気の向いたものがあれば、全力を尽くしてそれに関わっていく。その結果、知識が豊かになり、技術も上達していくのである」<sup>9)</sup>と述べている。今回の演習は、学生が興味・関心を持っていることが明らかとなり、次への意欲へとつながっていき、今後主体的に子どもの栄養・食育について学んでいくことに期待ができるものと考えられた。

## 2. 演習の効果について

演習目的の達成度で考えると、問9のミルクを適温にする

達成感が低く、今回の演習前の授業で適温のミルクに指を入れて体験もしているが、不十分であると考えられる。

自由記載内容からは、「口腔の構造の違いについて実体験から理解を深める」の目的について自由記載の表現からは十分に達成できたと判断できないが、「食事の自立過程を理解できる」の目的については、達成できているのではないかと考えられる。

## VI. 結 論

小児看護学における調乳・離乳食の演習の効果は、

- (1) 学生の興味・関心を高め、今後役立つものと考えられる。
- (2) 学習意欲へつながるものと考えられる。
- (3) 調理実習室使用による効果は、調理をするという心構えができるなど学習意欲を高める演習環境である。

## VII. 今後の課題

今回は、演習目的に対しての理解度を十分に検討できなかったため、演習目的の理解度を評価できるようにアンケート内容を検討し、より良い演習になるように研鑽していきたい。

### 引用文献

- 1) 山村美枝, 飯村直子, 佐藤奈々子他: 看護系大学における小児看護学の技術演習の実態と今後の展望, *Quality Nursing*, 4 (7), p. 47-50, 1998.
- 2) 泊祐子, 北村恵子: 生活に根ざした「小児の食と食生活」の授業, *看護展望*, 20(13), p. 80-85, 1995.
- 3) 吉田喜久代: 学生が主体的に学ぶ授業をするために教師は何を準備するか, *看護教育*, 42(4), p. 264, 2001.